

うんてい

(うんてい復刊) 第1号

平成20(2008)年11月30日



Contents

- ・ 巻頭のことば 本との再会 2
- ・ 所蔵資料紹介 欽定古今圖書集成解説 2
- ・ 図書館情報の資料展示 3
- ・ 図書館の公文書館機能について 4
- ・ 戦争体験文庫資料展示紹介 5
- 「若シ戦死ノ公報ガ有ツタ時開封シテ下サイ」～出征兵が残した手紙～
- ・ 奈良のもの・ひと① 関西鉄道の路線延長と大仏線 6
- ・ 図書館で調べる レファレンス事例紹介 7
- ・ 図書館イベント掲示板 8

巻頭のことば

本との再会

半世紀ぶりの出会いがあった。50年前に話をほとんど交わしたことがないのに、話が弾んだ。饒舌な相手にのせられて、無口なボクもとつとつと話したらしいのだが、相手は、きっと、ボクのことを無口だと思っていないだろう。半世紀という長い時間が一瞬のうちに融けていくことは、あたかも宇宙ロケットが大気圏に突入して地上に舞い戻るような感覚がする。「よくぞご無事で」と互いに声をかけ合いたい、という気持ちになる。

本との出会いも、同じようなことがある。ずい分以前に買ったが、気分がのらず、表紙も開けずに書棚の片隅に置かれたままの本を、突然読んでみたくなって手にとる。本と読み手と比べたら、いうまでもなく、活字がぎっしりと詰まっている本の方が、饒舌の風体をしている。読み手は、ゆっくりと活字を目で追っていく。追っていくにつれて、どうして、こんなおもしろい本を今まで開けなかったのかと、

奈良県立図書館情報館館長 千田 稔

自分の眼力のなさを責めてしまう。この本を読まなかった長い年月の空白を満たしたい欲求にかられ、読む速度が増していく。活字に強いられて読まされていた読み手が、突然、活字を追うのが、まるでつこく感じられてきて、活字を追い越すがごとく、先のことを知りたくなる。どんどんと読み進みたい衝動にかられる。読み手が饒舌になる瞬間である。

私は、これまで自分の専門外の本を買ってしまう癖があったが、ほとんど読まないままであった。ところが、最近、専門という枠のなかで身構えることもなく、自由に考えをめぐらせるようになったせいで、書棚の隅っこに長年置かれたままだった本と、感激的な、初対面のような再会をする機会がふえてきた。

長い年月を経た後の、人とでも本とでも再会は、絆を強くするのだろうか。

所蔵資料紹介

きんていここんとししゅうせい 欽定古今図書集成 解説

上海図書集成鉛版印書局 清光緒10(1884)
縦20cm、横13cm、夾板入り

今から99年前となる明治42(1909)年11月1日、当館の前身である奈良県立戦捷記念図書館が奈良公園内にオープンした。図書館設立に至る経緯については、奈良県立図書館開設70周年を記念して昭和52年3月に編纂された『奈良県立図書館小史』にゆずるとして、開館時の蔵書数は7,093冊、当時の図書原簿の冒頭、登記番号1番として記載されているのがこの『欽定古今図書集成』である。

『欽定古今図書集成』は全1万巻に及ぶ現存する中国最大の類書、すなわち古今の書籍から関連する事項を抜き出し、分類別に集めてまとめた一種の百科事典である。清朝初期、康熙帝の代に陳夢雷(ちん、ぼうらい)が編纂を開始し、次の雍正帝の代に蒋廷錫(しょう、ていしゃく)等が増補した上、雍正4(1726)年に銅活字本で印刷刊行された。全体を「曆象」、「方輿」、「明倫」、「博物」、「理学」、「経済」の6つの彙編に大分類し、さらにその全体を32典に、その典を6117の部に細分するという構造になっている。取りあげた古今の図書は6,000種以上に及ぶという。

この後、光緒10(1884)年に上海図書集成鉛版印書局が鉛活字本で印刷刊行した第二次刊行本、通称「図書集成局版」、「鉛字本」といわれる版が当館所蔵のものである。この版は全1,620冊及び目録8冊、全部で1,500部印刷され、流布本も多い。その後も多くの版が出版されており、現在では電子版も利用できるようになっている。

当館所蔵の鉛字本は残念ながら完全なものではなく、「選挙典」、「食貨典」、「礼儀典」のそれぞれ一部が欠けており、1,604冊及び目録8冊となっている。ただ、明治42年度の蔵書目録によると、目録共で1,619冊となっているので、当初から同じ状態であったのかどうかはわからない。

実はこの書物、当館で購入したものではない。明治42年6月21日、参謀本部から寄贈されている。どのような経緯で参謀本部から寄贈されたのか調べてみたが、今までのところ不明である。

(富山 久代)

参考：「奈良県立図書館小史」奈良県立奈良図書館 1977
「古今図書集成研究」 裴芹著 北京図書館出版社 2001

図書館の資料展示

平成17年11月3日、奈良県の新しい情報拠点として奈良県立図書館が誕生し、この秋で開館3周年を迎えました。明治期に創設された旧館時代から現在まで100年にわたって収集、保存された図書資料からデジタル資料やネットワーク情報資源など多様な形態の資料を蓄積したハイブリッド図書館として、レファレンスを中心としたサービスを展開しています。また、各種のイベントや展示、地域や行政との連携によるさまざまな事業や情報発信をおこなってきました。こうしたなかで図書資料展示についても図書館の情報提供サービスのひとつとして積極的に取り組んできました。

資料展示のスペースは3Fに3カ所と、2Fエントランスホールに近い情報資料書架に1カ所の4カ所に設けており、それぞれ最短で2週間、長い場合で3カ月の周期で展示を行っています。資料展示の企画にあたっては、来館される利用者に展示テーマについての理解を深めていただくこと、当館の幅広い多様な蔵書の魅力をアピールすることをポイントにテーマの設定を行なっています。

展示資料については資料リストを作成してホームページで紹介、来館者や県内公共図書館等に配布しています。また、より効果的な展示をおこなうことや展示活動が外部へ広がりをもったものにするために関係機関に協力を依頼し、展示テーマに関するパネルや資料を提供していただき図書資料とともに展示をしています。資料展示のポスターやパネルなどについては、デザイン、編集加工から印刷まで当館



で行っています。情報発信のための機器や設備が整った当館ならではの展示です。

資料展示のメインであるテーマ展示は、3Fブリッジで行っています。テーマそのものは、四季折々の季節にちなむもの、「団塊の世代を読む」「図書館で『食』を考える」など社会的な話題となっているもの、また奈良の歴史や行事に関するものなど、時宜をとらえた設定とするように考えています。今日まで好評であったものを一部紹介すると、子どもたちの来館の増える夏期に子どもだけでなく大人も楽しめる「MEDIAMIX 映像化されるファンタジー」や「石井桃子100歳」といった展示、図書資料とともに県立民俗博物館所蔵の酒器などの民具や、酒造家に授けられる“杉玉”、大神神社の酒造りの人形、地酒のラベルなどを並べた展示、また、近隣にはない美しさを誇る佐保川沿いの桜並木に呼応した「桜」関連の展示、を挙げるすることができます。

エントランスホールに近い2F情報スペースの書架ではビジネス行政支援の一環として、奈良県行政の啓発パネル展に合わせた展示や特許講習会、起業セミナー等のイベントとタイアップした資料展示を中心に行っています。奈良の伝統工芸である「漆」について「奈良漆器協会」との共催で漆の作品と漆関連図書を一緒に展示する試みも行いました。

3F戦争体験文庫コーナーでは「戦時下の国民生活」「戦争と手紙」などのテーマで図書とともに、戦時中の衣料切符や回覧板、戦地からの手紙、戦陣訓かるたなど、戦時下の暮らしや当時の人々の思いを直接うかがい知ることのできる貴重な展示となっています。

そのほか10月からは「新聞書評にとりあげられた本」についての常設展示を行っています。

今後も展示活動を通してさまざまな情報を提示し、利用者に図書館の魅力に触れていただくとともに、利活用に繋げていくことができればと考えています。

(井上 はるみ)

図書情報館の公文書館機能について

●公文書とは

国や県そして市町村においては日々大量の公文書が作成されています。この公文書は各行政機関や組織にとっての活動記録であるだけでなく、国民や自治体住民にとっても貴重な記録であり、国や各自治体の歴史を後世に伝える資料として不可欠のものです。

また、これらの歴史的に重要な公文書を体系的に保存し利用に供することが、国や各自治体の責務として求められています。

最近では、国においても「公文書管理の在り方等に関する有識者会議」が設置されるなど、公文書管理に向けて積極的な動きがあります。

●公文書館機能と業務について

公文書館の運営において実際に行われている業務にはどのようなものがあるのでしょうか。一般的には、各組織で作成されあるいは入手した公文書等の収集・整理・保存の各業務から始まり、利用・研究・普及に対応した業務が挙げられます。

公文書は、作成された時点から保存・廃棄までの長い時間、文書のライフサイクルの各場面において適正に管理されることが必要です。この管理体制によって利用者に確実な情報提供が可能となります。

●図書情報館の公文書と公文書館機能

図書情報館には、旧県立図書館が所蔵していた県の公文書（「奈良県行政文書」）が9,000簿冊程を継がれています。これらの文書の中では社寺関係が地域的な特徴を反映して点数が多く、その他では町村関係、農会・産業組合関係、銀行関係、鉄道関係、国宝修理関係、御陵・古墳関係、名所旧跡関係、宗教法人関係、教育関係などが比較的まとまっています。また、約2,300点の郡役所文書は全国的にも珍しく、明治・大正期の地方の郡役所制度を知るうえで貴重な資料群となっています。

これらの簿冊は、奈良県に関する一級の歴史資料として、県内外の研究者や行政機関職員また一般県民の方々にご利用いただいています。

また、平成13年4月には県の行政文書管理規則が整備され、行政文書の保存期間を全て有期限化し（規則第6条）、保存期間が満了した行政文書の中で、保存期間が5年以上の文書は、県立図書館に移管するものと規定されました（規則第9条）。これにともない、平成15年度から、保存期間が満了した文書が毎年移管されてきています。移管に際しては、奈良県立図書情報館公文書等の取扱いに関する規則（以下、「取扱いに関する規則」という。）の収集基準に基づき、奈良県に関する歴史資料として重要で保存の必要がある文書を選別して移管しています。

移管された文書は、整理分類して、閲覧可能な状態にまで整えています。

ただ、移管文書の中には個人情報などを含むものがありますので、当館では国立公文書館の取扱いの基準に準じて、該当する文書を一定期間公開しないことを取扱いに関する規則で定めています。

●公文書の活用

公文書は、当館で所蔵する一般的な図書館資料とともにレファレンス・サービスのツールのひとつとして活用されています。現在、高度なレファレンス・サービスの展開を目指して、目録の整備やレファレンスの回答事例の分析と積み重ねをしています。

●関連業務

その他の関連業務として、歴史的資料の解読を目指して、古文書を解読する講座を開講しています。現在は「入門」「専修」「演習」の3講座があり、各講座とも好評を博しています。また、地域史料の掘り起こしを目指して、奈良県内の歴史史料に関するデータの目録化と集積を目指す「地域史料目録データベース」の運営も専門家や研究者の協力を仰ぎながら行っています。

当館は公文書館機能を持つ図書館として、今後も機能の充実と運用ルールの整備を行いながら、歴史的に重要な価値ある公文書を後世に伝えて行くために積極的に対応して行きたいと考えています。

（鈴木 陽生）

◇戦争体験文庫資料展示紹介◇

「若シ戦死ノ公報ガ有ツタ時開封シテ下サイ」～出征兵が残した手紙～

戦争体験を風化させることなく、次世代に語り継ぐ。奈良県では平成8（1996）年度から戦中・戦後の社会や生活の様子を記録した資料を収集してきました。全国から寄贈された資料は現在約5万3千点を数え、「戦争体験文庫」として当館で所蔵・公開されています。

昨年の5月、私は戦争体験文庫資料が入ったたくさんさんの箱に埋もれながら、8月に行われる奈良県代官山iスタジオでの資料展示の構想を練っていました。その時、私の眼に入ってきたのが、表題の一文が書かれた一通の封筒でした。吸い寄せられるように封筒を手にとると、中には母親、妻、息子、娘、弟、親戚、それぞれ宛てた手紙が同封されていました。兵士が出征する時に家族へ残していった手紙です。それらの手紙には、身体の弱い母を案じる言葉、夫を亡くした妻を励ます言葉、子どもたちの立派な成長を祈る言葉、そして繰り返し綴られる「悲しまないで」という言葉…家族を残していく兵士の複雑な想いが刻みこまれていました。読み進めるうちに、兵士が語りかけるひとつひとつの言葉が胸にせまって、いつしか私はその場から動けなくなっていました。

この手紙をたくさんの人に見てほしい。そう思い、展示テーマを「戦争と手紙」としました。そしてその後、内容をさらに充実させて、館内で4回に分けて展示しました。

その展示のさなか、吉野町遺族会の方が来館されました。上記の手紙の寄贈者は吉野町の方です。私はずっと気になっていたことを尋ねてみました。手紙を残して出征された方は無事に家族のもとに帰ってこられたのか、ということです。すると、手紙を書いた方は戦死されたが、寄贈者である奥様はまだご存命とのことでした。

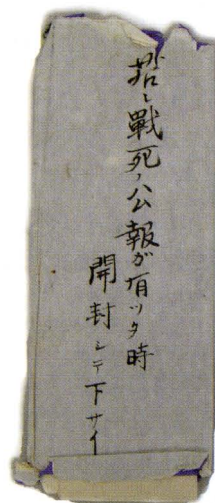
ああ…やっぱり…。生還されていたらいいな、と思っていた私は、それを聞いて何とも言えないやりきれない気持ちになりました。そして次に、奥様

のことに想いが至りました。ご主人を亡くされて現在までの長い間、どんな想いで過ごしてこられたのか。大事に保管していた「遺書」をどんな気持ちで寄贈してくださったのか…。さまざまな想いが私の胸をよぎりました。

私は大学で日本近代史を専攻し、知識としては一般人よりも戦争のことを良く知っています。しかし、知識として戦争を知っているのと、戦争を体験された方一人ひとりの想いを知ることは全く次元の異なることでした。戦争体験文庫を担当するようになって、そのことを改めて痛感しています。

戦争終結から63年。戦争について様々な議論がなされ、私たちの周りには多種多様な意見が渦まいています。しかしまずは、当時の体験を記録した資料を手に取り、そこから戦争とはどんなものだったのか、一人ひとりが知り、考えることが重要ではないでしょうか。資料はテレビや教科書とは別の角度から私たちの心に訴えかけるはずです。戦争体験者が年々少なくなり、その体験や想いを次の世代へと伝えていくことの重要性は今後さらに増していきます。そうしたなかで、体験者の想いを伝える場、また受け取る場として、戦争体験文庫がより一層活用されることを願っています。またそのために、微力ながら私も尽力したいと思っています。

（戸塚 順子）



戦争体験文庫資料展示の内容は当館ホームページでも紹介しています。
今回紹介した手紙の内容は「戦争と手紙①出征」の資料リストに収録されています。
ぜひご覧下さい。<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/kikaku.html>

奈良のもの・ひと① 関西鉄道の路線延長と大仏線

東大寺の故狭川明俊長老は、昭和59年9月の『奈良かぎろいの大和路』誌で、少年の頃盆正月の里帰りに大仏線を使った思い出を語っておられる。郷里は奈良市東部の狭川。法蓮一条通りの大仏駅で乗車し2駅先の笠置駅で下車、後は歩くという道順であった。汽車は速度も遅く、機関車が「一両だと途中で止まってしまう」こともあった。加茂駅での待ち時間も長く30分程停車していたという。

大仏線は、名古屋から大阪方面への路線延長を目指していた私設の関西鉄道が、加茂駅から奈良駅まで敷設した延長路線の通称で、明治31(1898)年4月19日に加茂駅一大仏駅間8.8kmがまず開業し、翌32年の5月21日になって奈良駅までの全線9.9kmが開通した。

路線コースは、加茂駅から西南に向かい木津川市東部の丘陵地域を南下し、黒髪山をトンネルで貫けて奈良市街に達するもので、大半が山間部を通っており、城和の国境付近等40分の1という急勾配のあるコースであった。

大仏線を走ったのは、^{オニカゲ}「鬼鹿毛」や^{イナズマ}「電光」と呼ばれた英米製の最新機関車であった。しかし急勾配でしばしば立往生したようで、明治34年4月には県境に近い「梅谿」付近の急勾配で立往生した列車に救援に来た機関車が追突し、貨車、客車が破損して負傷者が出るという事故もあった(『資料・鉄道時報にみる関西鉄道 明治34年~40年』)。

この時期奈良県内では、私設の大阪鉄道が明治25(1892)年2月に奈良一湊町間を全通させており、私設奈良鉄道による奈良一京都間も明治29年4月に開通していた。大仏線は奈良駅で大阪鉄道、奈良鉄道と接続する計画であった。しかし奈良駅使用をめぐる両社との協定が遅れ、大仏駅止まりとなってしまった。

当館には、大仏線の奈良駅乗入に関わる興味深い公文書が残っている。一つは開業間もない6月23日に関西鉄道社長白石直治が逓信大臣末松謙澄に宛てた「大仏仮停車場ヲ本停車場ニ改ムル願」で、『奈良市史 通史4』や『加茂町史』等でも紹介されている。「旅客貨物の乗降が追々増加の見込みが立ち、奈良市北部で乗降に至便な場所であるから」

『汽車汽船案内』明治31年8月1日改正より、以下同じ

本駅に改めてほしいとの願出である。この願出は、協定の遅れによるものがあった。明治32年2月17日に大阪鉄道社長、関西鉄道社長、奈良鉄道社長が逓信大臣に宛てた「関西鉄道線及奈良鉄道線連絡奈良停車場構内設計変更願」は、3社間の合意が成立した後のものと考えられ、添付図面等から各社の専用線と共用線があったことが分かる。明治32年5月10日の逓信省鉄道局長から奈良県知事寺原長輝にあてた文書は、関西鉄道が待望した「大仏奈良間開業免許状」が5月10日に下付されたという通知で、この11日後奈良駅までの乗入が実現した。

関西鉄道は、奈良駅への乗入により間接的ではあるが名古屋一大阪間の連絡を実現させた。その一方で、大仏線を経由しない別の名阪路線の開業も進めていた。私設の浪花鉄道と城河鉄道を買収し、明治31年11月に新木津を経由して大阪網島に通じる縦貫路線を開通させている。明治33年6月には、競合する大阪鉄道を買収し、奈良から大阪湊町に至る名阪路線も自社の路線とした。そして明治38年2月には奈良鉄道を買収し、平坦な木津一奈良路線を本線とした。

加茂一大仏間の乗客は32年には121,130人あった(鉄道局『明治32年度鉄道局年報』)。しかし奈良駅への乗入や木津経由が本線となったことで年々減少していく。明治39(1906)年6月、乗降者の減少、急勾配等の理由により大仏線は運転休止が決まり、翌40年8月21日加茂から木津駅へ入る短絡線開通にともなって廃止された。そして11月には大仏駅、大仏線とも早々に撤去されてしまう。この年の10月1日、関西鉄道は、鉄道国有化法により国有化されている。

大仏線の廃線跡は多くは道路となり、現在に至っている。しかし、木津川市東部の丘陵地域には今も隧道や橋台等の遺構がいくつか残っており、往時の面影を偲ぶことが出来る。

【主要参考文献】※文中掲載以外

- ・鉄道省『日本鉄道史 上、中』鉄道省／吉本喜洋「旧関西鉄道大仏線に関する調査」(『地理集団』1 奈良学芸大学)／奥田春彦『関西鉄道史』鉄道史資料保存会／田中真人、西藤二郎、宇田正『京都滋賀 鉄道の歴史』京都新聞社／「まぼろしの大仏鉄道1~13」(『奈良かぎろいの大和路』1983.10~85.1) 奈良出版館／大仏鉄道研究会『大仏鉄道物語』奈良町資料館

(森川 博之)

レファレンス事例紹介

◆一般資料から◆

Q：八雲琴はどんなものか知りたい。できれば写真も見たい。

A：八雲琴（やくもごと）は、二弦琴（にげんきん）の一種で、最初は出雲琴（いずもごと）とか美称として玉琴（たまごと）とか呼ばれていましたが、この楽器の創案者である中山琴主（なかやまことぬし：1802～1880）の処女作《八雲曲（やくもふり）》にちなんで八雲琴と呼ばれるようになりました。当初は太い竹を半分に分けて作られ、現在は杉や桐が使われていますが、胴は竹を模して湾曲させ中央と上下には竹の節を模した彫刻が施されています。八雲琴は、必ず琴台の上に載せて奏し決して畳の上などに直接置いてはならないとされています。元来中山琴主が、出雲国（島根県）の天日隅宮（あめのひすみのみや）に病気の回復を祈願に参詣し全快したことを感謝して作られたものとされ、そのような成立から神に奉仕する心で奏され、神道の宗教楽器として用いられています。『日本伝統楽器小辞典』や『音楽大事典』に詳細な解説があります。

当館では、大阪の八雲琴をしのぶ会から出版された『八雲琴：現代に伝える祈りの響き』という資料を所蔵しており、白黒ですが実際に演奏されている写真が何枚か収載されています。また、平成17年、東北歴史博物館で開催された特別展の図録『音と人の風景：特別展』には、島根県的美保神社に安政4年2月に奉納された重要有形民俗文化財の「八雲琴」の写真がカラーで掲載され、「本体裏には『天の下造り玉ひし大神の沼琴を宇津す琴は此琴 八雲琴元祖 中山禅正大夫八雲琴主（花押）印』と墨書きされています。」と付記されています。

【参考資料】

- 『音と人の風景：特別展』東北歴史博物館編 多賀城：東北歴史博物館 2005
- 『八雲琴：現代に伝える祈りの響き』八雲琴をしのぶ会編 八雲琴をしのぶ会 1989
- 『日本伝統楽器小辞典』郡司すみ編 エイデル研究所 2006
- 『邦楽百科辞典：雅楽から民謡まで』音楽之友社 1984
- 『日本音楽大事典』平野健次 [ほか] 監修 平凡社 1989
- 『音楽大事典』平凡社 1981

(松村 順子)

◆地域資料から◆

Q：大和郡山市の過去（特に明治時代）の水害記録が記載されている資料はないか。

A：奈良県の過去の災害について調べる場合、『奈良県気象災害史』や『奈良県の気象百年』を使います。今回の事例についても、『奈良県気象災害史』の「第十一編 近世気象観測時代」に明治時代の災害で全県下が被害を被った年の被害状況などが詳しく掲載されています。流域別降水量には郡山の降水量が掲載されています。附録の奈良県気象災害史年表には暴風雨・洪水などの項目にわけて災害の起きた年月日が記載されています。また、『奈良県の気象百年』の「第7節気象災害年表」には明治30（1897）年から平成8（1996）年までに、県内で発生した主な気象災害が年代順にまとめられています。

大和郡山市の水害についてもう少し詳しく調査された資料、『治水の地域史：大和郡山市筒井地区』の「三、明治以降・大和郡山市域における水害年表」には水害年月日、水害の概要が一覧表でまとめられて、状況等もかなり詳しく掲載されています。

大きな被害を出した災害の記録は、各市町村史に掲載されていることも多く、今回の事例も『大和郡山市史』『郡山町史』で回答が得られると思われましたが、『大和郡山市史』に明治期の水害記事の掲載はなく、『郡山町史』にも天明から文政時代の飢饉、風水害についての記述のみで、附録の年表にも明治期の水害記録は掲載されていませんでした。

【参考資料】

- 『奈良県の気象百年』奈良地方気象台編 大蔵省印刷局 1997
- 『奈良県気象災害史』青木滋一著 天理：養徳社 1956
- 『治水の地域史：大和郡山市筒井地区』地域史研究会編発行 1985
- 『郡山町史』郡山町史編集委員会編 郡山町 1953
- 『大和郡山市史』柳沢文庫専門委員会編 大和郡山市役所 1966

(上田 壽恵)



図書館情報館イベント揭示版

■ イベント、講演

(1) 図書館情報館・館長公開講座「図書館劇場」

平成20年度は「奈良は美味しいものばかり」をメインテーマに奇数月の第4土曜日に開催しています。

- ・ 5月24日(土) 第1幕
「稲の来た道と卑弥呼の食卓」
- ・ 7月26日(土) 第2幕
「平城京のグルメを探る」
- ・ 9月27日(土) 第3幕
「歌舞伎の中の食文化」
- ・ 11月22日(土) 第4幕
「茶と茶がゆと茶道」
- ・ 1月24日(土) 第5幕
「奈良は美味しいものばかりー酒」(予定)

館長講座、朗読、ゲスト講演で構成されています。

(2) 古都物語

朝日新聞社と共催で奈良の歴史文化を表現し、平城遷都1300年に向けたプレイベント、館の周年事業として開催しています。

平成20年度は、平成21年2月28日(土)に「劇的☆めくるめく図書館～ならノれきしデたわむれロ～」を開催し、当館のあらゆる場所で芝居をする予定です。キャストとスタッフを公募し、演出家松村武氏が作品監修・総合指導とともに作品を作り上げます。

(3) 平城遷都1300年奈良・読書の旅

読売新聞大阪本社と共催で、奈良を舞台に執筆された小説をテーマに、その作家を講師としてトークショーを開催しています。



11月16日(日)「翔べ麒麟」(第50回読売文学賞受賞作品)の著者、辻原登氏を講師に、奈良大学文学部教授、上野誠氏をゲストに迎え開催しました。

■ 企画展示

奈良の情報発信、国際交流による資料連携など、さまざまな企画展を開催しています。

【20年度の主な企画展示】

- ・ 地球儀の世界展
- ・ 大和を彩る染めの世界展
- ・ 写真展「大和からもうひとつつたえたいこと」
- ・ うつす想い「鎮目直樹・バードカービングの世界」展
- ・ 写真展「シルクロード行ー正倉院への道ー」
- ・ 日本とドイツの美しい本展(予定)
- ・ 西洋人の日本観(予定)



■ 企業・起業支援事業

(1) 経営無料相談会

(2) やまとネットショップ成幸塾

ネットショップを運営されている方等を対象に、セミナー、相互交流、実習の場を提供しています。

奈良県立図書館情報館報 うんてい

(うんてい復刊) 第1号

発行日 平成20年11月30日

発行人 千田 稔

発行所 奈良県立図書館情報館

〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000

TEL. 0742-34-2111 FAX. 0742-34-2777